

ま野良仕事にも出掛けられる。

手甲、腕貫き、手袋、手甲のことをテホイ、テオイという（手覆いの意味）。紺もめんで作り、手首から先は裕である。図16は五十歳代の人が嫁入り支度として娘への手作りであり、大切に保管されている。手首の紐の色は赤にしたり年齢に応じて選択。紐をつけずコハゼもある。

手甲はもんべと同様必ずつける人が多いが、手袋をつけるのは邪魔なのかつけない人も多い。

手甲と似ているのに腕貫き図17がある。手甲の甲の部分がなく、手袋が必要である。布地は紺もめんもあればプリント柄もある。古い男物靴下の足首から上を利用する人もある。

コハバキには、平らなものと筒型がある。図18は筒型。田植の時に蛭が吸いつくのを防ぐためにつけたものであ



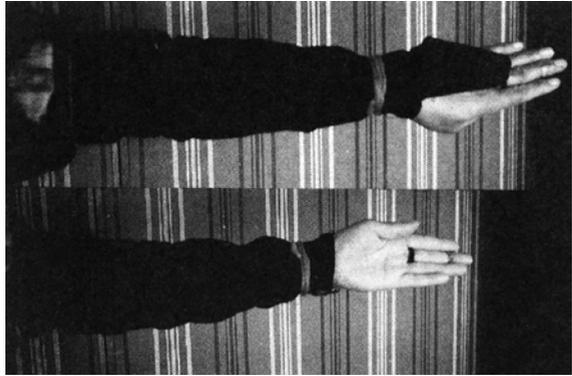
姉さん被り（図14）



夏の麦わら帽（図15）

る。腰巻き時代には膝から下を保護する必要があったが、もんぺを穿くようになって脚絆は不用になった。しかし、もんぺの上から着用して汚れを防いでいる。

蓑笠は雨がっぱが出来るまで使用されていた。笠は夏涼しいので最近でも利用されているが、蓑は見られなくなった。蓑は蓑で作られている。地方によって異なるが少々雨は通らず軽くて風通しはよいが、大雨になると下まで濡れる欠点があった。ナイロンガッパ、このガッパの模様も紺である。蒸れるのが欠点だが最近では通気性



手甲 (図 16)



腕貫き (図 17)



ハバキ (図 18)

も良くなった。

おわりに

日進月歩の現代、衣生活も時の流れに影響されていくのは必至である。大都会（東京）での十五年間の生活の中で故郷への思いを捨て切れず、春祭り、秋祭り、盆、正月、と帰郷し町の伝統行事に触れ、その良さを味わっていた。今、故郷へ戻って土に親しむようになり農作業が少しづつ身につつき、野良着にも関心を持つようになった。あちらこちらで見かける野良着姿の婦人に、働く美しさを肌で感じさせられたのである。そして、現在と過去の野良着を組み合わせているうちに、時代時代の要求するものが野良着にも色濃く表現されていることを発見



ワラミ (図 19)



緋模様のナイロンガッパ (図 20)

するとともに、野良着に対する魅力が一層強まって行った。

野良着は紺か黒に限られているが、そんな中にも一点、赤をつかったりして変化を求めておりお洒落心が感じられる。農村で生きた女性の長い長い労働の歴史の中から生まれ培われた被服文化という気がする。

学研都市、未来都市として開発が進んでいる中、昔ながらの尊い風俗、習慣を後世に伝えることが今に生きている私たちの努めであり、また、そのことが今世紀にふさわしい被服文化の創造に必要なことである。

今回の調査に当たり資料蒐集、写真撮影、解説などにご協力いただいた北稲八間区の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

参 考 文 献

一、私たちの相楽郡（相楽郡誌刊行会）

一、衣生活研究・一九八一年六十七号（関西衣生活研究会）